

東浦町の環境を考える会（第 2 回） 会議記録

日 時	令和 2 年 1 月 12 日（日） 10 時から 12 時	
場 所	東浦町勤労福祉会館	
出席者	委員（敬称略）	竹内 秀代、大原 克行、田中 央、水野 太起子、野村 安雄、小山 睦美、坂本 信博、新美 和子、三木 孝史、日高 寛子、藤崎 功太郎、浅田 陽宣、鈴木 紀男、太田原 努、今江 勇、小田 明美、吉田 臣了（欠席：牧 恭弘）
	ファシリテーター	高野 雅夫（名古屋大学院環境学研究科 教授）
	東浦町環境課	新美 英二 課長、竹内 美登 課長補佐、水野 恭志 主査
	地域問題研究所	春日 俊夫
会議内容の概要		
1. 開会あいさつ ・新美課長のあいさつ 2. 前回のおさらい、本日の説明 ・竹内課長補佐が配布資料を確認 3. グループワーク ・高野教授が環境問題の歴史を振り返る （ポイント） ・環境問題の最初は、60 年代頃の公害問題。四日市の大気汚染や水俣の水質汚染など。企業の責任が認められ、行政による規制も始まった。 ・現在では、大気や水質もかなりよくなり、河川も下水道や合併浄化槽の普及でよくなった。 ・次にごみの問題が出てきた。生活が豊かになるにつれてごみが増え、各自での処理ができなくなった。このため家庭ごみの処理が自治体の仕事になった。 ・焼却できないゴミや焼却灰は埋め立てるが、埋め立ての最終処分場は無限に増やせないため、リサイクルを進めてごみを減らすことが必要。 ・70 年代から 80 年代には山を削っての開発の問題が出てきた。住民の意識が高まり問題になってきた。名古屋市の藤巻干潟の問題、愛知万博を山を削ってやろうとした問題などもあった。開発と環境保全の対立の時代だった。この時に環境アセスメントが制度化され、開発に一定の歯止めがかけられるようになった。 ・1992 年のリオサミットで地球温暖化が議題になり、二酸化炭素の排出の増加が地球全体に影響を及ぼすことが指摘された。今年も猛暑、暖冬であり、気温は確実に上がっている。台風が強くなっていることにも影響している。 ・これらの問題意識から、持続可能な開発目標、SDG s が設定された。 ・東浦町で解決できることとできないことがあるが、何ができるかを考える必要がある。 ・前回のグループ（自然共生社会、循環型社会、低炭素社会）ごとに、「課題」と「取り組むべきこと」を整理する。「取り組むべきこと」は「行政」「企業」「住民」に分けて整理する。 ※各グループの意見内容は別紙参照 4. グループ発表 ・各グループの代表者が、グループワークの内容を発表。 5. 次回の説明 ・次回は、今日の意見をもとにして、審議会に提出するための文章化を行う。 ・第 3 回は 1 月 25 日（土） 10 時から実施		